会報No 461

子どもの本 研究会

【私の一冊】『お母さんの声は金の鈴　椋鳩十の母子論』　椋鳩十 著

（あすなろ書房）

米山尚子（熊本子どもの本の研究会会員）

椋鳩十は教師をするかたわら、多くの児童文学を残している。17年間、鹿児島で国語教師を務めた後、鹿児島県立図書館長に就任している。読書を通して母と子が語りあう機会を持とうとして始めた「母と子の二十分間読書運動」は、たちまち全国に広がり、親子読書運動の先駆けともなった。

最近の子ども達は多くの情報や刺激にさらされている。しかしながら親とのコミュニケーションや自然体験が不足している。幸福感や安心感を味わうことができず、自己肯定感が希薄になってきている。幼児期の親からの伝承体験を通じて人間本来が共有すべき情緒や感受性を獲得する機会が損なわれてしまっているということを痛切に訴えている本である。

幼少期に、見たり聞いたり読んだりしたことの全てが、前意識として心の中に残るものであり、それが大人になってから理屈だけでは決められない判断基準となって行動に現れると述べている。知識と共同して前意識が心の豊かさ、判断の幅の広さ、ものを感じる幅の広さをつくっていくので、幼少期の前意識の形成が、その人の後々の人間形成にも大きく関わっているのだ。

今は、子どものために書かれた優れた物語がたくさんある。母が声を出して読んでやるということは、きわめて大切なことである。心を込めて読んでやれば、優しい母の声が子どもの中に入り込んで懐かしい思い出とともに子どもの心にしっかりと焼きつくのだ。子どもが試練に直面した時、優しい母の声が、子どもの心をグッと抱きしめてくれる。なにかあるたびに思い出されてきて、子どもの心のなかで金の鈴のごとく鳴ると述べている。

現代社会は、ＳＮＳなどのツールにより知識や情報は多量に得られるが、それだけでは、著者の述べる前意識の形成には寄与せず、リアルなコミュニケーションの減少、人間関係の希薄にもつながる。

子どもに自分の感性を発見させてあげることができるのが、良い本であり、大人の働きかけがなければ、子どもは良い本と出会えない。それを大人が認識して、子ども達に良い本を手渡していきたいと思った。

2026年 1月 28日（水）特定非営利活動法人 熊本子どもの本の研究会　発行

https://www.kodomonohon. org　　E-mail:　info@kodomonohon.org

新年のご挨拶

特定非営利活動法人熊本子どもの本の研究会
理事長　横田　真

新年明けましておめでとうございます。

２０２５年度の講座活動は、公開講座「日本の昔ばなしを読む」（講師：森正人さん、全２回）を含め、すべて予定通りに開催できました。通常の講座も毎回10名以上と、例年より多くの方の参加があり、熱心な意見交換が行われています。これからも毎月開催してゆきますので、皆様のご参加をお待ちしています。

おはなしボランティア「びわの木」は、12月までにすでに31回実施しており、３月までにあと６回予定しています。子ども達と触れ合う機会が増え（昨年度のほぼ５割増）、ボランティアスタッフは、嬉しい悲鳴をあげながら充実した日々を送っています。オンライン講座は「グリム童話の魅力」を８月に続き２月に開催するのに加え、３月に「昔話の基本文献を読む」を開催予定です。子どもと大人の読書会（オンライン）は、４月、７月、10月、１月に小学６年生の女児３名の参加のもと開催しました。子ども達が選んだ本を題材にした、大人も入っての楽しいおしゃべりの時間です。本好きのお子様にぜひご紹介ください。

ふるさとくまもと応援寄附金（ふるさと納税、熊本県）による支援金は、公開講座の開催、おはなしボランティア「びわの木」活動、会報「子どもの本」の発行及び「びわの木文庫」の児童書の充実に活用いたしました。スタッフ旅費の拡充により、ここのところ増えてきているおはなしボランティア依頼への対応がスムーズにできるようになり非常に助かっています。ありがとうございます。来年度以降も活用させていただければと思っておりますので、熊本県外のお知り合いの方々にご紹介いただければ幸いです。

「びわの木文庫」では、西原小学校の学童に加え、帯山西小学校の学童へも貸し出しを行いました。本年も、学童、公民館、子ども食堂、病院など、子どもたちが多くの時間を過ごしている場所に本を貸し出していければと思っています。ご関心がありそうな方にご紹介願います。蔵書の整理もほぼできましたので、１月から毎週土曜日に「びわの木文庫」を開けて、本の貸し出しを行います。お子様と一緒にぜひお寄りください。児童書のご寄付なども含め、引き続きご支援よろしくお願い申し上げます。

講座報告

公開講座事前学習『かさじぞう』を読む

日　時　11月19日（水）
会　場　熊本市立図書館集会室
参加者　16人
課題本　『かさじぞう』
瀬田貞二／再話・赤羽末吉／画（福音館書店）
担　当　堀畑真紀子
読み聞かせ　辻由美

地蔵菩薩は六道の辻（来世と現世が通じる場所）に立って地獄に堕ちた衆生を教化し苦を救う代受苦の菩薩である。地蔵菩薩が六道という境界に立つことから、連想的に現実の境を守る道祖神と習合したと考えられている。村はずれの野原や峠は村の外と内の境界、来世と現世の境界、異界へ通じる領域である。境を超えて来るのは「福をもたらす神」または「災厄をもたらす悪霊」かもしれないし、境を越え旅に出ると「浄土へ続く道」または「地獄への道」かもしれないので、人々は境に道祖神や地蔵様を置いた。人間が地蔵に会えるのは午前６時頃。よって、地蔵の来訪が瀬田版では正月の明け方。一方、岩崎京子『かさこじぞう』は真夜中。こ

れは地蔵を大歳の客とするからである。大晦日は1年の境界で「神のような鬼のようなもの」が徘徊し、人間の振る舞いで「鬼となり神となって禍福」を頒（わか）つ。このように「笠地蔵」は空間と時間との境界での出来事である。笠を被る地蔵の姿は神の旅装で、常世の国から大歳に訪れる「まれびと」神を示す（鈴木正彦「歳の夜の訪客」）。「まれびと」とは古代人が考える神、神のような存在が時を定めてやってくる稀に来る客、「まれ人」の意。今でもこの信仰は秋田のナマハゲなど年中行事に生き続けている。地蔵様に笠を被せる行為は、地蔵の慈悲心が人間の心に感応して人間が地蔵の慈悲心を持つようになることを意味する。（好村友江「岩崎京子『かさこじぞう』考察」）

本昔話を時間軸でみると、柳田國男・関敬吾共編『昔話採集手帖』（1936年）や鈴木棠三『佐渡昔話集』（1942年）は「子どもが飢えて泣く」「仰山貧乏で」とし、極貧状況にある農民達の願いを反映する。関敬吾『笠地蔵さま』（1943年）は「己を滅した心情」「敬虔な心情」をテーマとし、戦時体制に準ずる考えが窺われる。瀬田貞二『かさじぞう』（1961年）は保育者養成向けの教科書として推奨されており、会話は誰もが理解できる方言で、それ以外は語り口調を用いている。赤羽末吉の扇面画は、地蔵が俵を引いて行く場面で絵に広がりと動きを出す効果がある（松居直・藤本朝巳『『かさじぞう』誕生の背景』）。岩崎京子『かさこじぞう』（1967年）は教科書に採用されており、老夫婦の清らかな、精神的な幸福をテーマとし、人の幸せは物に依拠するのではなく、心の中に存在することを読者に訴える。

◎参考文献　『いまは昔むかしは今』2・4巻　福音館書店

（報告　堀畑真紀子）

【参加者の感想】大晦日から正月の時期、この昔話を子どもたちに読んでいた▼悪人がおらず、ストーリーも心地よく子どもたちに伝えやすい物語▼お爺さんとお婆さんの優しさが寒さと雪によって際立つ気がした▼幼い頃は、大晦日のことを気にかけずこの昔話を聞いた。が、昔は太陰暦で、新年を迎える夜が新月の真っ暗な夜であることや歳神様から歳を授かるのが正月であることなど、現代の太陽暦とは違った背景であることに気付かされた▼紙芝居・脚本松谷みよ子（童心社）ではお婆さんの織った布をお爺さんが5個の笠と交換し、六地蔵に足りない笠の代わりに手ぬぐいをかぶせるストーリーになっており、松谷の感情が多分に含まれているように感じた▼歳神のお話で、善行者には良い報いがあるということだろう▼雪の中で地蔵様に笠をかぶせる行為に読者は暖かい気持ちになり、良いことをしたという思いを抱く。これは日本人が共有できる感性であろう▼良いことをしたお返しがお金で一生幸せになるというより、良いお正月を迎えられたという結びが欲しい▼子どもたちに語ることを考えた場合、一生幸せに暮らしたという結末は大事なのではないか▼元々はお正月を豊かに過ごせる物品を地蔵様が運んでいたのが、時代の流れで金品に変化した▼宇土の地蔵祭りを子どもたち中心でやっていたことの意味がわかった▼地域の地蔵祭りが人との繋がりにもなっているのでこれからも大事にしたい▼年越しの夜に老夫婦が地蔵様の俵ひきの掛け声で目を覚ましたように、自分も音に特別さを感じる▼支援学校の読み聞かせでは掛け声の繰り返しを楽しんだ▼パネルシアターで子どもたちと楽しんでいるが、講座で物語の時代背景など知ることができてよかった。

（報告　辻由美）

講座報告

2回連続公開講座「日本の昔ばなしを読む」

第2回「かさじぞう」

講　師　森　正人さん（熊本大学名誉教授、尚絅大学・尚絅大学短期大学部名誉教授）

日　時　12月17日（水）10時～11時30分

場　所　くまもと県民交流館パレア会議室7

参加者　21人

■読み聞かせ『かさじぞう』（瀬田貞二再話・赤羽末吉絵、福音館書店）　辻　由美

Ⅰ　テキスト『かさじぞう』

1、原話の昔話「笠地蔵」

テキストは、1961年1月発行で「かさじぞう」の子ども編としては相当古い。瀬田貞二著『絵本論　子どもの本評論集』（福音館書店1985年）の折込付録に、1977年11月のインタビュー「瀬田貞二氏の子どもの本の仕事」が再録されている。それによって、初めは保育者が子どもに読み聞かせる昔話として『母の友』（福音館書店刊行の月刊誌）に載せ、好評だったので絵本にしたことが知られる。元になったのは長野県の北の方の昔話。

2、『日本昔話大成』（角川書店）「九　大歳の客　二〇三　笠地蔵」として収録されている。日本全国に分布し南国では雨に濡れた地蔵とする語りもあるが、おおかたは雪の中の地蔵に笠を着せる。雪国の風土で育った昔話と感じさせる。

Ⅱ　雨に濡れる仏像（菩薩像）に笠を着せて利益（りやく）をこうむる説話

1、元亨（げんこう）釈書

元亨釈書は虎関師錬（鎌倉時代の禅宗の僧侶）が元亨2（1322）年に朝廷に献上した書物。その巻第二十九「拾遺志」。賀能は破れた堂の地蔵が雨に濡れているので自分の笠を着せる。数々の悪事を犯して地獄に墜ちた賀能を一人の僧が半身を焼かれながら救い出す。蘇生した賀能が破れた堂の地蔵に参ると、像の半身が焼け焦げている。かつて自分が笠を着せた地蔵が地獄まで救いに来たという話。

仏教史の研究者・眞鍋廣濟は『地蔵菩薩の研究』（三密堂書店1960年）で、この故事を旅客が路傍の石像を菅笠で覆う習俗の始まりと解説。旅人が自分の笠を道端の仏像に着せる習俗が古くからあったと指摘している。

2、真言宗打聞集（平安時代末1130～40年頃、覚鑁（かくばん）による談義を記録）

談義とは仏法を平易に説くこと。仏像に笠を着せる一番古い話で、従者の女が笠を仏に着せた功徳によって、甲斐の国司の北政所になるという話。平安時代末から仏像に笠を着せることによって功徳を得る話があり、連綿と現代の昔話まで引き継がれている。

3、菩薩とは

菩薩はインドの言葉で修行者の意味。完全な悟りを得た仏になるために修行を続けているのが菩薩。仏は完璧すぎて、たやすく近づくことができない。代わりに菩薩が煩悩にまみれた存在も迎え入れてくれる役割を引き受けた。観音菩薩は現世利益で現実的な願いを叶えてくれ、地蔵菩薩は来世の救済が基本。

4、地蔵菩薩について

地蔵菩薩は平安時代末から広く信仰されている。鎌倉時代の説話集『宇治拾遺物語』第十六に、「地蔵菩薩は暁ごとにありき給ふといふ事をほのかに聞きて」とある。「ありき」は「歩き回る」という意味。地蔵菩薩が移動して回るのは何のためか。「仏説延命地蔵菩薩経」という経に、地蔵の仕事として「毎日の晨朝（じんちょう）〈夜が明ける前〉に、諸定（しょじょう）に入り、六道を遊化（ゆげ）し、苦を抜き楽を与

へたまふ」とある。「定に入り」とは意識を集中させ、心が乱されない状態に入ることで、そのときに、魂を飛翔させることもできる。歩き回って苦しんでいる者たちを探して救済する。

『今昔物語集』等では、地蔵は小僧や少年の姿で出現することが多い。

瀬田『かさじぞう』、岩崎京子『かさこじぞう』（ポプラ社　１９６７年）における六体の地蔵とは、六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天）の衆生（仏や菩薩以外のすべての生命あるもの）を救済する六地蔵菩薩。それぞれ地獄、餓鬼など担当がある。だから六体ある。

もう一つ、地蔵は赤い帽子を被り、よだれかけをかけている。つまり赤ん坊に近い存在として見ている。人間を救う地蔵がなぜ赤ん坊なのかは重要な問題。おじいさんが雪の中の地蔵になぜ笠を被せるのかという根本的な理由と関わってくる。

Ⅲ　大歳に来訪するもの

1、大歳とは

『日本昔話事典』の「大歳」の項目で昔話との関係を説明している。大歳とは、1年の境目、すなわち大晦日から元旦にわたる時間、およびその行事をいう。亀の助力によって金や餅を得た「大歳の亀」や、宿を求めた乞食を心よく迎えいれた貧乏人は富み、断った長者は貧乏になった「大歳の客」など、大歳にまつわる話は多い。全体の項目が「大歳の客」で、その中の一つが「笠地蔵」とある。

2、常陸国風土記（8世紀前半に成立）「筑波郡」所載「古老曰」

歳の晩に訪れる乞食、あるいは聖なるものについて、古い日本の神話といえるものは、『常陸国風土記』の「筑波郡」に載せられている「古老曰」。昔、神祖の尊（みおやのみこと）が諸神のもとを巡行し、駿河国の福慈の岳（ふじのやま・現在の富士山）に至り宿を求めた。福慈の神は、新嘗（穀物を収穫して神様に捧げる祭り）を行って、物忌み（身を慎み外からの者を謝絶する習俗）をしているので泊められないと答えた。神祖の尊は恨み泣き罵った。続いて筑波の岳に登り宿を求めた。筑波の神は、新嘗を行っているが泊めて歓待した。神祖の尊は筑波の岳の永遠の繁栄を歌った。このようなわけで、富士山に人は登ることができず、筑波山には人が訪れ歌舞飲食は絶えることがない。

神聖な夜に訪れる神霊を快く迎え入れる正直で親切な者に福が授けられるという型の語りが認められる。また、富は外部からもたらされる。日本人の富に対する考え方だ。

Ⅳ　石の地蔵はなぜ歩くか

1、「子どもと民話（実践記録）かさこじぞう」（岩崎京子『かさこじぞう』所収）

学校教育で「かさじぞう」が取り上げられていて、子どもたちの反応は、「本当とは結びつかないからつまらない」「ありえない話だから面白い」の両方がある。

2、笠を被せる意味

われわれの注意をひくのは、石像が笠を被せてもらったことで生命が付加され、生物的行動をとることである。（『日本昔話大成』注）。これらがどう考えるかの手がかりにはなる。

【質疑応答】

司会　読み聞かせでの子どもの反応は？

参加者　「地蔵が動くのが面白い。ドッシンドッシン歩くんだろう」と想像して楽しんでいる。

参加者　子どもたちは、じいさまが「ここだ、ここだ」というところで、「ちゃっかりしている」と反応した。「寒いのに自分の笠を被せてすごいね」などの感想もある。

森　岩崎の話には「ここだ、ここだ」はない。

つまりおじいさんとおばあさんが徹底的に理想化されている。だからこそ教材に選ばれたという意見もあるが、国語と道徳・倫理をごっちゃにしない方がいい。岩崎の絵本の問題点だと指摘する人が多い。瀬田の方が評価は高い。

参加者　なぜ『かさじぞう』は六体なのか。

森　昔話はすべて六地蔵。なぜ六体かは三つ考えられる。まず、爺の心を効果的に表現するため。次に自分の手ぬぐいや笠を被せるのは、地蔵が宝物を運んで来るとき、その六体は自分が昼間笠を被せた地蔵であることの証拠になる。自分の行いがこういう形でかえって来た証拠を組み入れる。三つ目は地蔵は村と村の境に立っているため目に付きやすい存在だった。ここから六体という語り口が生まれてきたと考えられる。なぜ六体か明瞭に説明するのは難しい。

森　松谷みよ子の「かさじぞう」は語り口が変わっている。じいとばあの子どもは6人いたが、みな死んだ。2人が貧しかったから亡くなった、また、だから今貧しいということを示唆する。おばあさんは夜、自分たちの子どももおじいさんに笠をもらって喜んでいると言う。これがよだれかけをかける理由とどこでつながるか。じいが地蔵に笠を被せる理由と、地蔵菩薩が子どもの姿で造形されることに対する松谷の解釈かと思う。

参加者　賽の河原で地蔵は子どもたちを守っている。そこから地蔵と子どもは結びつくと考えていた。

森　親より先に死んだ子どもたちは、その先、地獄か極楽か別の者に生まれ変わるか分からないので賽の河原に留め置かれる。子どもたちは、親の生前の行いによって運命が決まるため、親がよい行いをするために「一つ積んでは親のため…」と石を積むが、鬼が突き崩す。その鬼たちを止めるのが地蔵。子どもたちを守る菩薩が地蔵となる。信仰する地蔵と守られる子どもが結びついてくる。

日本では、少年の聖徳太子の像の信仰や、赤ん坊の釈迦に甘茶をかける行事など、子どもの神聖な姿を信仰する習わしがある。背景として、子どもを人間と神霊との中間の存在とする考え方がある。子どもを神仏の一つとして信仰し、それが地蔵菩薩にも及んでいる。少年や子どもであるのは神聖なものという感覚の表れ。「かさじぞう」は、仏教者が持ち運んだことは間違いない。子どもを早く亡くした親の抱え込む問題に響く話ではあったのかもしれない。

参加者　地蔵に笠を被せる気持ちを日本人が共有している感覚はどこから生じたのか。

森　地蔵菩薩はインドの仏典に出てきて、原語では「大地＋包蔵」、それが地蔵と翻訳されている。日本では観音菩薩は女性と重ね合わせ、地蔵は子どもに重ね合わせる。

日本には仏像に対して作り物ではなく、人間と地続きのものとしてみる考え方がある。本来の日本の宗教は、神は抽象的で目に見えない存在として信仰されていた。仏教と一緒に仏像も入ってきて、信仰の対象が形を持つのは衝撃的で、単なるものとして見ることはできなくなる。平安時代の初め頃の書物に、尊敬すべき仏とは違って身近なものとして受け入れるというエピソードがある。尊敬より親しみの感情を寄せる。これは観音によく表れ、平安時代の初めの人たちは、観音菩薩を親と重ね合わせて信仰し、親のない子どもが亡き親の代わりとして親しみを寄せた。一方、地蔵は、子どもとして、子を亡くした親の思いを受け止めてくれた。それが笠をかける行為になる。石の抽象的存在ではなく、肉親に近い存在として見る。おじいさんが地蔵に寄せる視線はそういうことだと思う。

（報告　木村一惠、横田恵美）

「びわの木文庫」が再始動します

皆さん、「家庭文庫」って聞いたことありますか。どんなものか、ご存知でしょうか。家庭文庫は、地域の子どもたちに本の楽しさを伝えるために、個人の家庭の一部を開放して本を貸し出す、ちいさな私設図書館のような場所です。営利を目的とせず、主宰者の思いやりと情熱によって運営されているのが特徴で、絵本や児童文学を中心に、子どもたちが自由に本と出会える空間を提供しています。この文庫活動というのは、地域や学校にある公立図書館が今のように充実しておらず、図書館が開いている日が限られている１９５０年代から全国に広まり、子どもたちが気軽に立ち寄れる「本のおうち」として、地域に根ざした読書文化を育んできました。読み聞かせや季節の行事、手作りの遊びなど、本を中心にした交流の場としても親しまれています。

今回ご紹介する「びわの木文庫」は、「熊本子どもの本の研究会」の中心で活動されていた故横田幸子さん（前理事長）が、70年初めころに、市の移動図書館から2カ月に1回40冊の本を借りて、熊本市東区の自宅の居間を開放して始められた家庭文庫です。幸子さんは、本好きの長男さん（現理事長）が小学生のころ、本を借りるのにとても苦労していたのを見て、何とかしたいと思われたのがきっかけだったと聞いています。びわの木文庫は、その後、地域文庫「にしばる文庫」に発展して、子ども会のお母さんを中心とした地域に密着した文庫活動と発展し、息の長い文化活動となりました。

しかしながら、公立の図書館、学校の図書館が充実して行くのに伴い、家庭文庫、地域文庫の需要が小さくなっていったのは、時代の変化でした。けれど、児童書や絵本に特化した「本のおうち」の魅力は、今も全く変わりなく、私達はこの東区西原にあるびわの木文庫を是非本格再開したいと思って整備してきました。文庫には、児童書や絵本を合わせてなんと５０００冊を超える本が揃えてあって、皆さんをお待ちしています。現時点では、開館日は毎週土曜日10時半から16時の予定です。お子さんやお孫さんと、またはご自身だけでも「本のおうち」で至福の時間を過ごしていただきたく思いますので、どうぞお気軽にお越しください。文庫の守り人たちが皆様のお越しをお待ちしています。

（興津　暁子）

◆参加者募集◆

オンライン講座 第7回「グリム童話の魅力」

日時　2月27日（金）19時～21時

講師　竹内識晃（東京家政学院大学非常勤講師・熊本子どもの本の研究会会員）

本講座では、グリム兄弟の『子どもと家庭のメルヒェン集』（通称「グリム童話集」）を比較民話学で丁寧に読み解き、その魅力を探ります。今回は「歌って跳ねるひばり」（ＫＨＭ88）を取り上げます。グリムのメルヒェンの異類婚姻譚についても考えます。

オンライン講座　「昔話の基本文献を読む」

日時　3月31日（火）19時～21時

講師　竹内識晃（前掲）

本講座では、基本文献を読み、昔話への理解を深めます。マックス・リュティ著、『ヨーロッパの昔話―その形と本質』（小澤俊夫訳、岩波文庫）は、グリムのメルヒェンやヨーロッパの昔話の語り口を分析した著作です。今回は「序説」「一次元性」を読み、リュティの様式分析用語にも触れます。

（講師・記）

参加希望の方は、それぞれの講座の3日前までに左記アドレスに申し込みください。

＊申し込みアドレス zoom@kodomonohon.org

2月～3月の活動の案内

○講座　初茜に学ぶ「谷川俊太郎さんを偲んで」
日時　2月18日（水）10時～11時45分
場所　熊本市立図書館集会室

○閉講講座　1年を振り返って
日時　3月11日（水）10時～11時45分
場所　熊本市青年会館第一会議室

＊会員外の方も500円で参加できます
講座申込アドレス kouza@kodomonohon.org

○研究会活動検討会（オンライン）
日時　2月8日（日）10時～11時

○グリム童話の魅力（オンライン）
日時　2月27日（金）19時～21時

○昔話の基本文献を読む（オンライン）
日時　3月31日（火）19時～21時

＊申込アドレス zoom@kodomonohon.org

○おはなしボランティア「びわの木」
2月5日（木）11時～11時半
熊本県立図書館（0歳児）
2月21日（土）11時～11時半
熊本市立図書館（小学生）
2月28日（土）14時～14時半
熊本県立図書館

○「びわの木文庫」貸し出し
毎週土曜日　10時半～16時
https://kodomonohon.org/biwanoki/

本はともだち！

このところ毎朝8時から小泉八雲と妻セツをモデルとしたNHKの「ばけばけ」を楽しく見ています。そのお二人のひ孫である小泉凡さんご夫妻と昨年12月13日の懇親会でご一緒させていただきました。凡さんは松江にある小泉八雲記念館長をされていますが、もともとは東京のご出身。大学で民俗学を専攻し、日本各地を旅した上で、奥様がいらっしゃった松江に移住されています。お二人とも気さくな方で、勝手に八雲夫妻のイメージを重ねながら、松江での活動のお話などをお聞きしました。

翌14日は宇城市で開催された凡さんの講演「宇城市を訪れた小泉八雲―現代に生きるその作品と思想―」を聞きました。三角港訪問の経験を踏まえた「夏の日の夢」という一編（「青空文庫」で無料で読めます）から始まり、八雲が祖先を大切にする日本の文化に共感し、日本文化のありようを19世紀末の欧米社会に発信していたことなどをご紹介いただきました。八雲は「耳なし芳一」などの怪談で有名ですが、八雲が発信した日本文化に関する認識が、八雲のファンで長男一雄（凡さんの祖父）の親友でもあり、後にGHQの幹部となったボナー・フェラーズ氏を通して、天皇制の維持を始めとする日本の戦後体制作りに影響を与えたということはもっと知られるべきことだと思います。ちなみに凡さんの名前は、ボナーさんにちなんでとのこと。16日には熊本博物館で開催中の「八雲とセツ　家族の物語」（2月15日まで）にも行き、八雲づくしの日々を過ごしました。

講演会で購入した『小泉八雲と妖怪』（小泉凡著、玉川大学出版部）『思い出の記』（小泉節子著、ハーベスト出版）に加え、『心　日本の内面生活がこだまする暗示的諸編』（小泉八雲著、河出文庫）、小泉八雲記念館企画展図録『小泉セツ　ラフカディオ・ハーンの妻として生きて』をびわの木文庫に新たに収蔵しました。

（横田　真）

■編集＝金子・上林・横田　《イラスト》安田

特定非営利活動法人
熊本子どもの本の研究会　発行
〒861－8029
熊本市東区西原1丁目15の24
電話　096（382）5090

ふるさと納税でのご支援もお待ちしています。